

## 論文の内容の要旨

論文題目 早期統合教育と情報保証に関する研究  
聴覚のハンディを乗り越えるために

氏 名 小 幡 敏 信

様々なハンディをもつ人々にとっても優しく有効な環境を実現させようという観点から、車椅子を使用する人と視覚にハンディをもつ人に対しては多くの考慮がなされはじめ、環境は緩やかに改善されてきたといえる。しかし、聴覚にハンディのある人は、物理的環境改善の対象としてあまり考慮されてこなかった。

聴覚のハンディがある人が教育や雇用や婚姻などの機会均等を得るための社会的統合を完成させるために、本論文では、著者本人の体験から、聴覚のハンディを主な対象として、問題点と解決方法を検討した。具体的には、聴覚にハンディを持つ人たちの為の優しく有効な環境はどうあるべきか、早期統合教育導入の必要性、聴覚にハンディのある人々にもない人々と対等にするために意志疎通を図る情報保証の必要性、およびそのための具体的な方策を実証的に明らかにする。

本論文の構成は以下の通りである。

I 章は、目的を示している。

II 章は、聴覚にハンディを持つ著者の出生から高校入学までの体験をもとに、言語の獲得プロセスの特徴、早期統合教育の効果と必要性を論じている。また統合教育の現状を把握して、これからの統合教育をより普及させるためのプロセスを提起している。

III 章は、聴覚にハンディがある場合、生活行為に必要な場面において、どんなことを行う時に問題があるかについて調査した結果を示している。多くの場所や状況で、「聞こ

える」ということが前提とされたデザインがなされ、聴覚にハンディがある人にとって、配慮されるべき状況がたくさんあることが確認された。また、文字表示板の有効性についても確認した。

IV章は、統合教育実現のためにも必要な情報保証を十分に果たすための条件について、主として手話を対象として探求した。

聴覚にハンディのある情報の受け手（ここではキーパーソンとする）は、話し手、手話通訳者、スクリーン等の全ての情報をビジュアルにより受けとっているため、それらの見えかたが重要となる。

実験・調査によって、次のような結果が出た。

- ① キーパーソンは、手話通訳者の表情や手の形だけではなく目を動かして、教授の口の形、情報機器で映し出される像、ホワイトボードに書かれる字なども見ていること、講義室において、教授から見て右側に座るほうが講義を受けやすいことが判明した。
- ② 講義室において、キーパーソンが教授、または手話通訳者の一方を中心視で見つめる時に、周辺視によって残る他方をどれだけの空間的広がりの中に見えるかどうかを実験した。キーパーソンが見やすい条件は、次のように示される。i) キーパーソンと教授を結んだ線上に手話通訳者が位置するとよい。ii) 距離より角度を小さくすることが重要である。iii) 教授と手話通訳者の間が近いほうが教室全体でみやすい。
- ③ 東京大学大学院の計18回の講義の観察調査をおこなった。実際に行われた講義において、②で示された条件が有効であるかを検証してみた。重要なことは、キーパーソンが、教授の顔、手話通訳者の手話、スクリーンの像の3カ所をいつも同時に見る必要があることを示している。3カ所が同時に見えるための条件として、角度が小さいことと、教授の動き全てについてまたスクリーンの像について、キーパーソンがそれらを同時に見えるような全てを満足するような手話通訳者の位置を設定する必要がある。その位置を考慮した建築計画や家具配置計画が重要である。

このような調査・実験は、前例がなく、統合教育を更に進めるに当たって価値がある。

終章は、提言として「心身にハンディのある人々のニーズについて、解決することを最優先の原則とすることが、全ての人々に優しく有効な環境論に繋がる」ことを述べている。

健常者中心の発想ではなく、人間それぞれのライフスタイルを尊重していく発想への展開が必要である。全ての人々が1つの基準に基づくのではなく、人間それぞれの基準があり、お互いに尊重しながら、それぞれのニーズに対してもきめ細かく対応するような、多様性のあるスタイルを包括することが求められる。それは、完全なる統合教育がなされてはじめて、できるようになる。